

## 家持の悲しみ

森脇一夫

家持は悲愁感傷の情緒情感を多くうたつた。かれの遺した作品は、題詞や左注やによつてほとんど制作の動機が知られるが、それらの題詞や左注には、しばしば「悲傷」「悲嘆」「悲別」「悲歌」「哀傷」「感傷」「悲情」「悲緒」「愁緒」「締緒」「鬱結の緒」などの語が記されており、歌詞のなかにも、「悲し」「もの悲し」「うら悲し」「嘆き」「息づく」「いぶせし」「おほほし」「思ひ結ばれ」「憂し」「情不樂し」「苦し」「痛き情」「こころいたし」「わびし」「情くし」「精神もなし」「情も行かず」「思ひうらぶれ」「心もしのに」「思ひ萎え」「情摧け」「慨し」など悲愁感傷の情緒情感をあらわす語がきわめて多く用いられている。

いま、これらの作品を具体的に検討することによつて、家持が何を悲しみ、また、かれの悲しみがどのような性質のものであつたかを明らかにしたいと思う。

雨隠り情いぶせみいで見れば春日の山は色づきにけり  
 (8一五六八)

この歌は、左注によれば、天平八年九月の作で、家持が数

え年十九歳と推定せられる時のものである。「秋の歌四首」とあるうちの一首で、「ひさかたの雨間もおかず雲隠り鳴きて去くなる早田雁がね」(8一五六六)「雨晴れて清く照りたるこの月夜夜更にして雲なたなびき」(8一五六九)など一連の作との関連を考えると、若い家持をとりこめた暗い天候を単純にうたつたものと思われる。

右の歌とほとんど発想を同じくするものに、

ひさかたの雨の降る日をただひとり山辺に居ればいぶせ  
 かりけり(4七六九)

隠りのみ居ればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば来鳴く晚  
 蟬(8一四七九)

などの作がある。前者は紀の女郎に報え贈つたもので、巻の四における歌の配列の順序から、家持が久邇の京にいた時(天平十二年十二月より天平十六年二月まで)の作と推定せられるものであり、後者の制作時期は不明であるが、発想や歌調のいちじるしく類似している点よりすれば、あまり時日をへだてない時期に作られたものであらうと思われる。久邇の京における家持の生活については、後に述べようと思う

が、明け暮れやりきれない憂鬱がかれを捉えていたらしいことは、これらの歌によつて想像し得る。

天平十一年の夏六月、家持二十一歳の時、かれを悲しませるきわめて大きなショックがあつた。愛する女性を喪つたことによる。かれは「亡妾を悲傷して」

今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を宿む (三四六一)

とうたつた。その後しばらくの間はこの悲しみから解放せられることなく「砌の上の瞿麦の花を見て」は、今は亡き妹を思い、「移朔しゅくわつりて後、秋風に悲嘆かなしみて」は、世の無常をかこつたが、「悲緒いまだ息まず」として、

かくのみにありけるものを妹もわれも千歳のごとくたのみたりける (三四七〇)

以下五首の歌を作つた。家持の全作品を通じて、この時ほどの慟哭は他に見られない。「亡妾」とは何人であるか不明であるが、かれが坂上の大嬢と結ばれる前のことで、恐らくは側近に召使つていた女性であろうという。三四六七の歌によれば、この女性との間には幼い子があり、若い家持の悲しみも深かつたらしい。「世間無常」の觀念もかれの作品の随処に見られるが、若くして体験したかような悲しみが、当代流行の仏教思想と容易に結合して、深くかれの心奥にぎざしたものと思われる。

天平十三年四月三日に、久邇の京より、家持が弟の書持に報告送つた歌の題詞に「橙橘初めて咲き、鶯鳥纏り嚙く。この時候に對して詛ぞ志を暢べざらむ。因りて三首の短歌を作りて、鬱結の緒を散らすのみ」とあつて、

あしひきの山辺に居れば霍公鳥木の間立ちくき鳴かぬ日はなし (17三九一一)

霍公鳥何の心ぞ橘の珠貫く月し来鳴きとよむる (17三九一二)

霍公鳥あふちの枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで (17三九一三)

の歌を載せている。これらの歌を卒読すれば、そこはかとなき春愁の表現のように思える。しかしながら、この時の久邇京滞在は、そうしたのかな春を満喫するにふさわしい情態ではなかつたはずで、前途のある内舍人として宮廷に奉仕する家持が時局の動きに盲目であつたとは考えられず、あわただしい新京建設のさなかにあつて、前途の不安を感じ、鬱結にとざされたであろうことも容易に想像し得る。久邇遷都前後の事情は、続紀および万葉卷六の題詞によつて知られるが、天平十二年の九月に大宰の少弐藤原広嗣の叛乱があり、奈良の京にも、一部にこれと呼応する空氣があつたので、十月征討の軍が西海に出発した後、奈良に留守軍を置き、聖武天皇はまず伊勢に行幸、十一月には河口の行宮に到り、十日の

間ここに止まりたもうた。この間に広嗣の軍は敗れ、広嗣は肥前の国松浦の郡において誅せられたので、天皇は伊勢を發して美濃の国に入らせたまひ、途中狹<sup>ささぎ</sup>残の行宮、多<sup>たぎ</sup>芸の行宮を経て、十二月の十五日には山城の国久邇の地に到り、やがてここを都と定められた。この行幸に、家持は内舍人として供奉し、各地で歌をよんでいるが、右の歌は久邇奠都後四月あまり経過した天平十三年四月三日の作である。新都建設は緒についたころであつたらうが、天地静寂の久邇の山辺に、若い官人たちは恐らくは奈良への郷愁も断ちがたく、前途の明るい希望もなく住みわびていたにちがひなく、ともすればおちいる鬱結の緒は、歌によつて散ずるよりほかはなかつたものと思われる。

久邇に都のあつたのは、天平十六年の二月まで滿三か年の間で、十六年の二月二十六日には難波の宮に遷都せられ、さらに十七年の正月には近江の国紫香楽の宮に遷都せられ、同年五月にいたつて平城の京に復歸せられた。このころになつてしだいに政局も平穩に歸したらしい。家持はこの年從五位下に叙せられ、翌十八年三月には宮内少輔に任ぜられ、六月越中の守に任ぜられ、七月に入つて任地におもむいた。ところが着任後間もない九月二十五日、弟書持の喪を聞き、「長逝せる弟を哀傷する歌」(17三九五七)を作つた。この歌のなかの注によれば、書持は花草花樹を愛して多く寢院の庭に植

えたとあり、優雅な詩情の人であつたらしく、家持との応答の歌にも橘やあぶちの花をうたつてその人となりを匂わせている。左注には「遙に弟の喪を聞き、感傷して之を作れるなり」と記している。この歌の歌調は、人麿や憶良の影響をほかにして語ることを得ないが、その悲しみの真情は十分に汲みとることができる。

家持の挽歌には、右のほかには、天平十六年春二月に作つた「安積<sup>あまか</sup>の皇子の薨じたまひし時」の六首(3四七五―四八〇)や、天平勝宝二年五月の作に成る、賀藤原南家の二郎<sup>なかつゆ</sup>(豊成と推定せられる)の母の喪を悼む「挽歌一首并に短歌」(19四二―四四―四二一六)、同じく天平勝宝二年五月の「処女墓の歌に追同する一首并に短歌」(19四二―一、四二二―二)などがあるが、これらはいずれも先人模倣の跡がいちじるしく、悲しみの実感は、さしてあらわれていない。

天平十九年の春、三十歳の時、家持は大患をわずらつた。「忽ち枉疾に沈み、ほとほとに泉路に臨めり。仍りて歌調を作りて悲緒を申ぶる一首并に短歌」(17三九六二―三九六四)、「掾大伴宿禰池主に贈れる悲歌」(17三九六五、三九六六)にそのことがうたわれている。17三九六四の歌の左註には、「天平十九年春二月二十一日、越中の国の守の館にて、病に臥し悲傷して、いささかこの歌を作れり」とある。どういふ病であつたかは明らかでないが、時節からみて、今日のいわゆ

る感冒か、急性肺炎のたぐいではなかつたらうか。これらの歌も憶良の「日本挽歌」や「老身重病年を経て辛苦す、及び児等を思ふ歌」などの影響が見られるが、必ずしも創意が見られぬわけではなく、死境を彷徨する悲哀を懸命にうたつた。

春の花今は盛りににはふらむ折りてかざさむたぢぢ手力もがも  
(17三九六五)

はその衰弱の程度のいちじるしいことを示している。人間は肉体の衰弱したとき心弱くなり、悲しみの情緒が湧くものである。家持の「悲緒」「悲傷」も、こうした性質のものであつたらう。

この時の病は月余にわたつたらしく、同年三月五日「病に臥して之を作れる」と注した漢詩および短歌(17三九七六、三九七七)の序に「やや鬱結を写のぞき」「愁緒を鈍のぞく」とあつて、これらの作品のモチーフがこうした生命の危機における悲しみであつたことを示している。これらの情緒が春愁の情趣にからみ、都に残してきた幾人かの女性との恋情からんで詩を形成したと考えるのが至当であらう。

その後になつても、家持は病床に臥することが多かつたらしく、天平勝宝八年六月十七日の作の題詞にも「病に臥して無常を悲しみ、修道を欲ほりして作れる歌」と見え、「現身は数なき身なり」(20四四六八)とか、「泡沫みほなす假れる身ぞとは知

れれども」(20四四七〇)などとうたつている。不惑の齡に近づいた心身の衰えを悲しんだものであらう。

家持の歌には、春愁の情趣をうたつたものが少なくないが、そのいちじるしいものをあげれば、まず、天平勝宝二年三月はじめに作つた、

春まけてものがなしきにさ夜ふけて羽ぶき鳴く鳴誰が田  
にか住む(19四一四一)

あしひきの八峯やっせの雉鳴きとよむ朝明あさけの霞見ればかなしも  
(19四一四九)

などがある。天平勝宝二年の三月には、家持はまだ越中の守在任中で、この二首は越中の国府でよまれたものであらう。

家持の作は、このころになつてようやく先人の模倣を脱し、感覚的な印象を刻むようになったといわれるが、これらの歌にもそうした明瞭な感覚形象に、そこはかたない春愁を匂わせている。北国の春の訪れは、にわかには春愁をかき立てる底のものであるらしいが、このころすでに越中滞在五年目を迎へようとする家持にとつては、望郷の念もまたやみがたいものがあつたであらう。「春まけてものがなしき」情感には、そうしたさまざまの情趣の錯雑を思わせるものがある。

春愁のモチーフによつて作られた、もつともいちじるしい作品は、天平勝宝五年の二月二十三日と、二十五日との作、春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴

くも (19四二九〇)

わがやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも  
(19四二九一)

うらうらに照れる春日に雲雀あがりこころ悲しもひとり  
しおもへば (19四二九二)

などである。左注は「春日遅遅として鶺鴒正に啼く。悽惻の意、歌にあらざるは撥ひがたし。仍りてこの歌を作り、もちて締緒を展ぶ」と説明している。天平勝宝五年は家持三十六歳の時にあたり、前々年の天平勝宝三年に少納言に任ぜられて都に帰つていた。このころには家持の官人としての地位も安定していたはずであるが、かれの孤独の魂は、常にこうした哀感の境地をもとめて、繊細に繊細にと磨ぎ澄まされたのである。かような哀感的情趣は、万葉集中において家持ただひとりの到達し得た境地である。

家持の作品にしばしばあらわれるいま一つの悲しみは、別離の悲しみである。かれが越中の守在任中の天平十九年四月、税帳使として上京するに先だち、大目秦忌寸八千島の館で送別の宴が開かれた。この時家持は、

奈呉の海の沖つ白波しくしくに思ほえむかも立ち別れな  
ば (17三九八九)

ほか一首の歌を作つたが、その左注に「いささか相別るる嘆を陳ぶ、四月二十日」と記されている。四月二十六日には、

掾大伴の宿禰池主の館で別離の宴が開かれた。この時にも

家持は「吾無しとな佗びわが兄子」(17三九七七)とうたつたが、四月三十日、大伴の池主に贈つた歌に「京に入らむこと漸

に近づきて、悲情撥ひがたく、懐を迷ぶる一首并一絶」と題した、その歌の中に「白雲の たなびく山を 磐根踏み 越え隔りなば 悲しけく 日の長けむぞ そこ思へば 心し痛し」

(18四〇〇六)とある。いくぶん儀礼の意によつてその悲しみが誇張せられてあるうが、しばらく馴れ住んだ任地を離れ、親しい人々と別れる悲しみは、いつわりとは思えない。

家持が少納言に任ぜられ帰京を命ぜられたのは、天平勝宝三年七月十七日である。この時家持は数首の歌を作つてゐるが、そのなかに「七月十七日を以て少納言に遷任せらる。

仍りて悲別の歌を作りて朝集使掾久米の朝臣広繩の館に贈り貽せる二首」(19四二四八、四二四九)と題する作があり、序して「既に六載の期に満ち、忽ち遷替の運に値ふ。ここに旧に別るるの懐、心中に鬱結す。滯を拭ふ袖、何を以ちて能く早かむ。因りて悲歌二首を作りて、式ちて莫忘の志を遺す」と記し、

あらたまの年の緒の長く相見てしその心引わすらえめや  
も (19四二四八)

その他の歌をのこしている。任満ちてここに帰京の時を迎えた喜びはさることながら、多年親交を重ねた部下の人々と別

れゆく悲しみも、また一しおであつたらしい。この歌にはしみじみとした実感が流れており、四句の「心引」という語も、巻の十四に唯一の用例があるとはいうものの、実感のこもつた用法としては、集中これあるのみである。

帰京後、少納言の任にあること三年、天平勝宝六年四月には兵部少輔に任ぜられ、その間十一月には山陰道巡察使を命ぜられたりしたが、翌天平勝宝七歳二月、家持は兵部少輔として防人の事務を掌るため難波におもむいた。この時、交替して筑紫に遣わされる諸国の防人たちに同情し、その別離の悲しみを推察して「追ひて防人の悲別の心を痛みて作れる歌一首并に短歌」(20四三三二—四三三六)、を作つたが、なお、防人にかわつて、「防人の情となりて思を述べて作れる歌一首并に短歌」(20四三九八—四四〇〇)、「防人の悲別の情を陳ぶる歌一首並に短歌」(20四四〇八—四四二二)などを作つた。これらの歌は、従来必ずしも高い文芸的評価を与えられていないが、防人の境遇に同情し、その悲しみを悲しみとした人間家持の真情は、家持文芸の枢軸であり、こうした悲愁の真情が、やがて防人たちの歌を集録して、当時の東国民衆の声を永久に伝える不朽の業をなさしめたものと思う。以上家持の作品にあらわれた悲しみの情緒情感について、いささか考えてみたのであるが、思うに、家持は孤独孤愁の人であつた。その作品を見るに一見敍景の作と思われるもの

にも「鹿鳴く山辺に独のみして」(8一六〇二)、「霍公鳥、いやしき喧ぎぬ 独のみ 聞けばさぶしも」(19四一七七)、「吾のみ聞けばさぶしも霍公鳥」(19四一七八)とうたひ、また「独幄の裏に居て遙に霍公鳥の喧くを聞きて」(18四〇八九の題詞)、「独竜田山の桜花を惜しめる」(20四三九五の頭詞)、「独江の水に浮び漂へる糞を見て」(20四三九六の題詞)、「独天の河を仰ぎて」(20四三一三の左註)、「独秋の野を憶ひて」(20四三二〇の左註)などと記されている。家持の作品が悲愁感傷の特色をもつのは、こうしたかれの孤独孤愁の資質に負うところが多いであらうが、さらに、幾多先進の指摘するように、かれの生涯が越中の守赴任の得意な一時期を除いて、官人として大むね逆境にあつたことが、こうした傾向を、より一そういちじるしくしたものと思う。

万葉集に見られる限りでは、天平宝字三年五月家持四十二歳の時、因幡の守として郡司らを招待して宴を開き、「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事」(20四五一六)と歌つたのが、かれの年代の知られる歌の最後であり、その後、晩年にかれを襲つた数々の非運は続紀によつてかなり詳しく知られ、かれの悲しみがいかに深かつたかを思わせるが、その後の悲しみについては遺憾ながら作品として遺されてない。